



西郷隆盛

田原坂の決戦で見せた 健康で強力な野党のあり様

●外交ジャーナリスト

手嶋龍一

九

州・筑豊の生まれで戦
後は北海道の炭鉱主だ
った父は、応接間に40

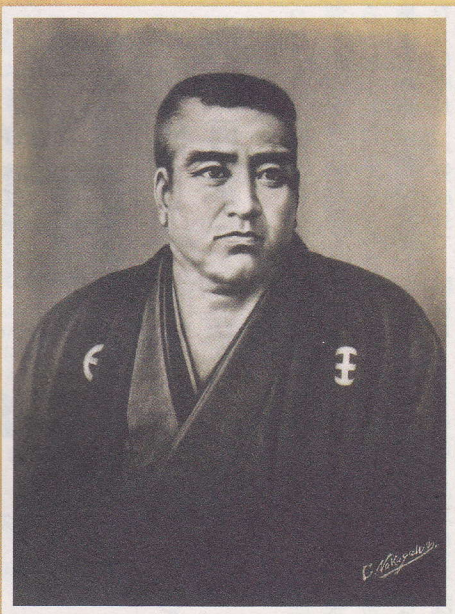
号の絵を架けていた。軍服を身に
つけ、眼をかつと見開いた巨軀の
西郷隆盛だった。炭鉱が斜陽にな
って書画・骨董の類は売られてい
ったが、この油絵だけはなぜか最
後まで我が家に残った。名のある
肖像画家の作品だったのだが、戦
後の世相が明治維新の元勳を不人
気なものにしていたのかもしれない。
い。だから北国で少年時代を送っ
た僕は西郷さんとずっと一緒だっ
た。

奄美大島の龍郷町を訪ねたのは
今年の新春だった。安政の大獄の
余波が薩摩の政局にも及び、西郷
隆盛が島流しになった地だ。愛加
那との間に菊次郎と菊草をもうけ
た葉ぶきの家は、愛加那の血をひ
く龍昭一郎さんがいまも守ってい
る。薩摩藩はサトウキビを厳しく
取り立て、不作の年には税を払え

ない島民を拷問にかけることまで
した。西郷さんは藩の役人との間
に入って取りなしたという。だが
この偉人も奄美の人たちの間では
さほどの人気を得ていない。薩摩
藩の収奪がいかに凄まじかったが
分かるだろう。

もう何年も宰相の不作が続いて
いる平成のニッポンでは「西郷待
望論」が沸々と湧きおこっている。

(1828～1877) 幕末・明治の軍人、政治家。
倒幕推進者として薩長同盟、戊辰戦争を遂
行。維新の三傑のひとり。新政府で陸軍大將
となったが、征韓論で大久保利通と対立し
下野。西南戦争を起こして敗れ、鹿児島・城
山で自刃した



政治は一流でも経済が一流なら大
丈夫——こうつぶいていた当の
財界人が「強力な政治なくして経
済の飛躍なし」などと言っている
昨今である。いまや誰しもが国家
を束ねる強力な政治指導者を待ち
望んでいるように見える。そして
政局の鍵を握る第二極の要に「日
本維新の会」まで誕生した。彼ら
もまた明治維新の推進力となった
西郷隆盛を新しい指導者像のひと
りにだぶらせているのだろうか。

司馬遼太郎は名篇「街道をゆ
く」の「肥薩のみち」で、西南戦
争の激戦地、田原坂を歩きながら
明治維新直後の時代の空気につい
てこう述べている。

「当時、日本中に充満していた反
政府気分や野党的勢力（国粹主義
や自由民権主義）はことごとく西
郷とその麾下一万数千の薩摩人の
決起と成功に熱狂的な期待をよせ
た」

ところが、この田原坂の決戦で、

西郷軍が敗れ去ったことで、これ
らの野党勢力は抛り所を一举に失
ってしまふ。そしてこの敗北が、
この国の歴史に類をみないほどの
強力な官僚国家を成立させたこと
断じて、司馬遼太郎は次のように記
している。

「西郷の敗北は単に田原坂にとど
まらず、こんにちにいたるまで日
本の政治に健康で強力な批判勢力
を成立せしめない原因をなしてい
るのではないかとさえおもえる」

司馬遼太郎がこの文章を綴った
40年前、官僚国家の弊害に非を鳴
らすその筆致はまだどこかためら
いがちだった。だが、東日本大震
災の復旧に所得税の増税まで課し
ながら、税金に官僚たちが群がっ
て寡奪する惨状をまのあたりにし
たなら、西郷隆盛の敗北を惜しむ
気持がさらに募ったことだろう。
西郷隆盛はいまのニッポンにとっ
て驚くほど今日的な存在だといっ
ていい。